「愛の黄昏」 倉田 仙吉

昼過ぎから降りはじめた小雨は、夕暮れとともに激しい豪雨となって路面に打ち付けていた。その雨音を聞くともなく聞き流しながら、仙吉は今日の夕食の準備をどうしたものかと考えていた。妻の美穂は、観光ガイド案内の外国人通訳者として、大型船が寄港する沖縄に福岡空港から飛行機で出張し、そのまま継続して長崎観光案内に回り、仕事が終わってもすぐに帰宅することなく、もう一週間も家を空けたままである。スーパーマーケットで総菜を買って済ませれば簡単なようだが、気持ちの上でどういう訳か以外とじっくり来ない。毎日、同じ場所で作られた何となく同じような味付けの惣菜ばかり食べていると、少々飽きがかかるのかもしれない。とはいえ、男子厨房に立たずを実行している頭の固い、料理の点ではまさしく無能な仙吉にとって、台所でみずから腕をふるうことなど無理な相談である。従って、これまでただの一度も試みたことさえない。というのが一応の建前だが、実際にちょっとした料理を試しに作ってみても、お粗末極まりなく、とても美味しく食べられる代物は出来上がらない。かえって気分的に落ち込むのが関の山である。あちこちのコンビニやスーパーの惣菜売り場を覗いてみても、どれもがそれ程代わり映えはしないように見える。それなら外出して、どこかの食堂でも利用すれば良いのではないかと、耳で囁くように、もう一人の合理主義者たる仙吉が話しかける。しかしそうするには、息子の健一と話し合わねばならない。いつからこうなったのか、どういう訳があるにしろ、妻の不在中でもそれぞれが勝手に夕食を取ることはない。必ず二人揃って食卓を囲むことを習慣にしている。しかも仙吉は年を重ねるに連れ酒量が増え、夕食では毎日、飲み慣れた安っぽい銘柄の日本酒の熱燗がないと食事をした気分になれない。彼自身、これは一種のアルコール依存症だと考えている節がある。なぜといって、もし日本酒が体内に摂取されない日には、普段の睡眠すら危うくなり、なかなか寝付くことが出来ない。寝付かれない若かりし頃、彼もかなりの読書量を誇り、就寝前の寝床では必ず何等かの本を手にして、枕酒代わりにしていた。しかし今では、特別の感激も興奮もない読書、単なる面白半分読書の意志などとうに萎えてしまっている。だから読書がアルコール代わりを務めることなどありえないし、眠られぬから書物でも手にしてみようかといった気持ちがわき上がることもない。最近、何故かただぼんやりと一週間ほど前の散歩を思い出しながら、そこで交わされた他愛のない夫婦の会話を反芻することがよくある。「太った豚ではなくやせたソクラテスになれ」と、ある有名大学の学長が入学式か卒業式で述べたことがあった。これを聞いて、仙吉はやせたソクラテスは無理だとその時も感じたが、今では立派な太った豚になってしまった。歩くのさえ年寄りみたいにままならず、無理して歩き回ったりすると、すぐに足腰のそこそこに痛みを覚える体たらくだ。少しばかりでも体重を落としたい願望から、夫婦揃っていわゆる仲良しウォーキングを始めてから数ヶ月が経過した。一周が丁度マラソン距離の十分の一にあたるコースが、車で五分程度の田舎の公園に整備されている。このコースを一時間かけてゆっくりと歩く。おそらく歩いている者たちの中で、一番遅いスピードに違いない。次から次へと追い抜かれていく。ぶらぶら歩きをしながら、仙吉と美穂はその場で思いついた話題をお互い提出しては、連想ゲームのように話を進めていく。突然、仙吉は「人生二回結婚説」を唱えた、推理小説作家で某大学教授だったKに話題を転じた。Kが実際、自分の言説を実行に移したかどうか、仙吉の記憶にはもはや定かでない。にもかかわらず、最近かなりの頻度でスナック通いをしながら、若い女性を相手に酒杯を傾げることに楽しみを見いだしている仙吉は、何かにつけ妻の美穂から嫌みタツ

プリの皮肉めいた言葉で、「結局、男は若い女性がお好きなのね」と冷や水を浴びせられては、それに真正面から反論する元気もなく、嫉妬心は女に限らず男でも厄介極まりない物だと内心ではうそぶきながら、ただにやにやと曖昧な笑いでごまかし、脳髓のなかでは高名だった教授の二回結婚説に憧れの気持ちを抱くのである。男性が若い時に、一回りも二回りも年上の女性と最初の結婚をする。そして年を取り、弱り果て、死に神に取り憑かれた女性が、時期的にうまい具合に彼方の彼岸へ足を踏み入れ、この世に別れを告げた時、幸いなるかな、今度は壮年あるいは老年に近づいた彼は、若い女性と二回目の結婚に踏み切る。もちろん事がそれ程すっきり簡単に進むとは、想像だけでも容易でないのは知っている。この人生二回結婚説のメリットは、どこにあるのだろうか？若くて性的欲望が激しく、体の中で雄叫びを上げるような力に満たされた青年にとって、経験豊かな中年女性の、大らかで鷹揚な性的応対によって、若者の性的満足度は十二分に満たされることになるのだろうか？また二回目の結婚で壮年に足を踏み入れた男性が、若い女性を豊かな性的舞台上へ招き寄せ、新しい欲望の原野を開拓し、彼女とおのれの中に平和な安定した基底を組み上げることなどあり得るだろうか？まさしく「うまい具合」にいった場合だけ可能かもしれない。しかし死別ではなく、「お前と暮らすことなんか、もう金輪際御免だ」と三行半の捨てぜりふを投げつけ、綺麗さっぱり長年連れ添った妻と別れることができれば、熟年離婚がはやりと言われるこのごろの風評を耳にしている、相手がどんな表情で応じるのか、興味津々といったところだ。だがそれは、少々甘い考えに過ぎないのではないだろうか。結婚している夫婦が別れるのは、激しい恋愛ののち一緒になる場合より遙かに多くのエネルギーが必要だと、これもある多芸な才能で著名な版画家が言っていたが、別れと新しい出会いを、何度となく繰り返し実行できた男だからこそ、経験からそのような言葉が簡単に口をついて出るのだろう。そして可能なら若くてぴちぴちした女性と一緒に新しい生活を始められたら、いかなる未知の楽しい人生模様を味わうことができるのだろうか？いつも何かを憧憬するような、甘ったるい願望の中でぬるま湯のような人生に慣れきった仙吉には、そもそも無理な願望ではないだろうか。若くて新しい女性と、これまでの生活とは別の生活を送りたいなどという欲望は、一体、人間のどこからわき出てくるのだろうか？この欲望は、普通の時間、人生の平均的な時間よりも長い時間を、出来るならば、さらに自分の子供たちの時間の中でも生き続けたいという単純な生存的願望とは、基本的に異なる欲望ではないだろうか？なぜに人はこのような欲望を実行したいと願うのだろうか？若い女性との新たな出会いと願われた性的快樂の成就によって、疲れ果てた老年男の人生の重要な果実が、新たな熟成を迎えるなどということが有り得るだろうか？

「お願いがあるんだけど」と、スナックの純子ママは、突然、思い付いたような身振りで話を切りだした。カウンターの左端にぼつねんと一人坐って、水割りのウイスキーを飲んでいた仙吉は、別段、特に身構えることもなく「え、何？」と聞いた。「今度の十一月の私の誕生日に、胡蝶蘭が欲しいんだけど、買ってくれる？」「いいよ」「色はピンク系、五本立てが欲しいわ」「まさか百万もする訳じゃないだろうね？」「まあね、高いのは五万ちょっとするわよ」「ああそう、わかった」。ママが幾つの誕生日を迎えるのか、仙吉は知らなかった。たとえ年齢ではなく干支を聞いても、ママが答をはぐらかすことはいつものことだったから、話はそれで終わりだった。仙吉はメモ帳を取り出すと、簡単にポイントを幾つか箇条書きにした。最近とみに記憶力の減退を感じ、一度聞いたことをすぐに忘れてしまうようになったからだ。いくら思い出そうと焦っても思い出せぬことが、

最近、何度となく生じていた。特にひどいのは、人の名前や地名などの固有名詞が、記憶の奥底から削除されてしまったかのように、どうしても出てこないことがある。呼び出そうと焦れば焦るほど、いつも決まって不可能なのだ。胡蝶蘭が何故、誕生日のプレゼントとして純子ママの胸の内に浮かび出てきたのか、仙吉にはわからなかった。後になってママは「このカウンターに一度飾ってみたかっただけだわ」と、本心とも冗談とも判断できぬ言葉を口にした。単なる虚栄心と自尊心を満足させるために、胡蝶蘭を望んだのかもしれないな、と仙吉は考えた。ママに尋ねれば、「そうよ、それ以外の理由なんてないわよ」と言うかもしれない。しかし胡蝶蘭の花言葉が「永遠の愛」を意味することを、ママは知っているのだろうか？永遠という言葉すらも信じていない仙吉自身の気持ちは、本人すらも驚くほど、割合のんびりとしていたが、結構なぜか嬉しい心地もしていた。相手が望むものを与えるだけのことに過ぎず、これほど簡単明瞭なこととはそうザラにあるわけではないだろう。我々は「求めよ、さらば与えられん」という立派な言葉を知っているではないか。強い欲求から発せられる言葉は、その実現可能性が極めて高いのは世の常である。

雨の降るなか、美穂と仙吉は長靴を履き、傘を差しながら公園を散歩していた。祭日にもかかわらず、流石に雨の日は散歩する者は少なかった。それでもちらほら、黙々と歩く姿が見られた。美穂は通訳ガイドの同僚である諸石さんの話を始めた。彼女はマッサージが好きで、30分四五千円の値段で、肩こりをほぐすため仕事の後に頼むことがよくあるということだった。マッサージ師は一体男なのか、それとも女性なのかと仙吉は聞いた。それは残念だけど尋ねていないわと、美穂は応じた。仙吉はその時、男性のマッサージ師を思い浮かべながら、彼女が男に身を任せる場面を想像していた。身を任せるとは、言葉の上でも少々大胆な表現だが、もちろんマッサージのためには当然のことである。相手の指先に身を任せつつ、快樂原則の奥底に深く沈みこみながら、その一歩先の快感は、男と女の性的関係から生ずる快樂の味と、大した違いはないのではないか。しかし仙吉の勝手な大胆な想像とは裏腹に、単なる肩こりをほぐすためのマッサージに過ぎないと、彼女はきっぱりと述べたそうである。

由紀恵ちゃんは長崎県平戸の出身で、福岡の短大を出た後、アパレル関係の会社に勤務、その後いろんな職業を転々として、最後に中洲に流れ着いたと思われる感じのいい女の子だったし、現に今でもその印象は仙吉の脳裏に刻まれている。女の子にしては酒が強く、かなりの量を飲んでも平気な顔をしていて、普通の男なら酒の強さでは太刀打ちできないほどである。飲めば飲むほど割合饒舌になり、ピンク色に染まる顔つきが何とも言えぬ魅力を醸し出す。父親もかなりの酒豪だったらしい。残念ながら若くしてこの世を去ったということだ。仙吉がインターネットで調べて知った純子ママのスナックを初めて訪れた時、ママは病いを得て入院中で、由紀恵ちゃんがママ代わりとなってスナックを取り仕切っている風だった。仙吉は12時半過ぎに訪れて、30分ほど経過した1時には早々に切り上げたが、その時「また来るからね」の一言が、由紀恵ちゃんの記憶に鮮やかに刻まれたと、後になって彼女が語ったことがある。仙吉も期待して訪れたママが不在だったにもかかわらず、由紀恵ちゃんを一目見た時から気に入ったが、その後このスナックに長く通うことになったものの、彼女にその好印象について洩らすことはなかった。何故とって、ホームページで眺めた純子ママの写真が感じ良いから、このスナックを訪ねる気になったのだと、話の弾みで述べた手前、それにこだわり、その自分

の話を踏み越えることは出来なかったからである。実際インターネット上の純子ママの写真は、仙吉お好みの、ピュアーな感じだった。その第一印象が仙吉の心理の奥深くに刻み込まれたために、その印象にいつまでも捕らわれるような、自分から抜け出せぬ奇妙などうしようもない刻印となって、仙吉の胸裏に残ったのである。従って、出勤前の由紀恵ちゃんと同伴することもなければ、ママを伴わず由紀恵ちゃんと二人でアフターの食事や新しい飲み屋に行くこともなかった。そのままおよそ2年ほどの長い間、二人の関係には何の進展もなければ、お互い特別の親しさを増すような行動も起こすことはなかった。実に淡々とした話が二人で続けられるばかりで、お互いの境遇や好みなどが少しは分かったものの、そこからどちらかが更に一步を踏み出すようなことにはならなかった。二人とも遠慮がちで、巷間伝えられる血液型がB型特有の優柔不断な性格や、一步退くことをよしとする謹み深さなどの所為で、何事もない年月がいたずらに流れ去るばかりだった。

竹の内由紀恵は彼女の本名ではない。竹野内豊のファンである彼女は、自分の源氏名の姓を彼から取ったと語ったことがある。しかしそれ以上のことは、残念ながら聞かずにじまいに終わった。竹野内豊がどんな男かも知らなかったからである。その後機会があって、インターネットで調べたところ、かなりの美男子で、女心をくすぐるだけの容貌と雰囲気を持っていることは明らかだった。由紀恵ちゃんは長崎出身であるが、長崎の平戸という具体的な名前を出すことを嫌がるのは、出身地を特定され、近親者や学校時代の友人など身近な者に、中洲のスナックで働いていることを知られたくない心理が働くからのようだ。これは純子ママにも同じ事が言える。山口県の徳山出身ということは秘密にしておきたいようだ。仙吉は面白半分、冗談半分から「スナック純子」のホームページを作ることになった。それまでのHPがあまりにもお粗末だったので、まあ骨を折るのも良いかといった軽いのりから、ホームページ作成を無料で請け合うことになってしまったのである。それぞれのプロフィールを作る段になって、出身地の記載を平戸や徳山まで具体的に書いてしまったところ、彼女たちから削除をすぐに命じられた。しかし、彼女たちはその理由を述べることはなかった。

「中洲の新橋ビル近辺を出勤するため歩いていたら、本名で呼びかけられてびっくりしたのよ」と、由紀恵ちゃんはいかにも唐突な面もちで、面白そうに話を始めた。実は仙吉も彼女の本名は知らないのだが、「じゃあ本名はなんていうの?」と聞くこともなかった。その相手は土曜日とか日曜日、バレーボール大会で練習したり試合をしたりして、顔見知りの女性だということだった。由紀恵ちゃんはいかにもスポーツで鍛えているといった体育会系の、すらりとした美人であるのは間違いないが、思いも寄らぬ場所で本名で呼びかけられると、中洲でいつも使用している源氏名が、突然虚空に消え去ったような奇妙な感じに捕らわれるのかもしれない。その後半月ほどして、由紀恵ちゃんと約束して、勤務店が終わった深夜の一時ごろ、仙吉はその中洲のスナック zwei という変な名前を探し当て訪ねてみた。この店にはママが二人存在した。つまり共同経営者というわけである。美鈴ママは33歳、純子ママ（スナック純子のママと同じ名前だ）は34歳で子持ちということだった。由紀恵ちゃんから美鈴ママは結婚していると聞いていたので、「旦那さんは何をなさっているんですか」と聞いたところ、会社員だが、店では結婚していることは内緒だと口止めされた。純子ママはお酒が好きで強そうだった。話の途中で、携帯電話の番号を教えると請われ、登録から何からすべて純子ママにお任

せしてしまった。彼女はテキパキと登録を済ませた後、横文字の素晴らしい歌を一曲披露してくれた。実に英語の歌詞が自然な発音で、洋楽を歌わせれば右に出るもののないくらいの由紀恵ちゃんと較べても、見劣りすることのない出来映えだった。由紀恵ちゃんの英語の歌がまた日本人離れした発音とイントネーションで、聞く者の心に実に気持ちよいのである。店が終わった由紀恵ちゃんは結構遅く zwei へやって来たが、美鈴ママは、早速由紀恵ちゃんに自分の店で働かないかと申し出たのには、仙吉も驚いた。なかなかいい女の子が見つからないのよと、付け加えたが、由紀恵ちゃんは結構乗り気だった。後になって、店を移るメリットは何があるのか、と仙吉が尋ねてみると、「そうね、勤務時間は夜の2時までだし、お給料は今と変わらないのよね」と、彼女は意外に冷静に応答した。美鈴ママは早速明日からうちの店に移ってこないかと、繰り返しかなり強引に勧誘していた。その後由紀恵ちゃんがどうしたのか、仙吉には今はまだ分からない。多分まだ前のスナックで働いているだろう。年明けの新年になったら、またいつか由紀恵ちゃんの店に行ってみれば、どうなったのかははっきり分かるだろう。

印刷会社社長を仮にMとしておこう。仙吉は実は彼の本当の名前を知らない。だが「スナック純子」の純子ママの話に頻繁に登場するのが、この社長なのである。Mは昔バンドマスターとして、女の子の間では評判を取った男だったということだ。八十歳を過ぎているとは思えないほどのテクニックと美声で、演歌などカラオケを実にうまく歌いこなす。仙吉も何度か、その歌い振りに惚れ惚れと聞き入ったことがある。Mはどういう成り行きか今では印刷会社を経営しており、それなりの業績を上げ、生活には困らないようだ。時折り接待のため、得意先のお客と一緒にスナックにやってくるが、何曲かカラオケで歌い終わると、いつも早々に切り上げる。しかし残念なことに、結婚しているものの奥さんとの間に子供に恵まれず、会社を将来誰に譲ったらいいのか今も分明ではなく、悩みは尽きないようだ。このMが純子ママに、自分の死後、墓を守ってくれないかと依頼したことがあるとのことだ。「そんなことを言われても、どこまで本当の気持ちなのか測りかねるわ」と、純子ママは躊躇うような奇妙な口振りで、仙吉に語りかけた。「死後のことを依頼するのは、本当に信頼しているからで、冗談では言えないでしょう」と、仙吉は割合真面目な面持ちで応じた。病弱の奥さんが凄惨な焼餅焼きで、何にしろ私が割り込む余地などないのだと、諦め顔を見せながら純子ママは話を続けた。仙吉の想像では、純子ママとMとの付き合いはかなりの長期間にわたっており、二人の間には他人が覗き込むことの不可能な領域があるように思える。それは単なる金銭的な援助だけではなさそうだ。しかしスナックのママとして、男の四五人は居るのが当たり前（本人の言）だとすれば、うまい具合に男心を操りながら、それ相当のものを引き出す手練手管は、当然彼女にも備わっていることだろう。だがそうはいっても、結局のところ、男一人一人と向きあうところからいろんな事は始まるのだから、そういう話を仙吉が聞かされるのもおかしな事だ。これほどの内密な話をあなたに聞かせるほど、私はあなたを信頼しているのよ、とは決して彼女が述べることはないだろう。しかしそのニュアンスを含ませながら女主人公の役割を演じているのは間違いない。車を新車に買い換えた時、援助を申し出たのがこの社長だったらしいが、車の代金に較べて、提供した現金の額があまりにも少なすぎたために、純子ママの心中には不満が渦巻くことになった。事実、仙吉がその金額を聞いた時、少額過ぎて、啞然として開いた口が塞がらないとはこのことだと思ったくらいである。

桜子は中国人留学生だが、雑誌で見つけたスナック従業員募集に応募して、純子ママのお店に採用された。彼女は日本語学校を二年間で修了し、F大学の外国人枠入試に合格して、大学に入学したばかりの20歳である。コンビニなどでのアルバイト経験はあるが、水商売の世界は全くの素人だ。それでも採用されたのには訳がある。実はスナックでは、若い日本人の女の子を見つけるのが容易でないのである。派遣会社に登録している若い女性が多いが、最近の女性は一時的に固定したお店で働くことを嫌がる傾向がある。定期的に雇われてスナックで働く女の子も、お客やママとのちょっとしたボタンの掛け違い、すなわち些細ないざこざですぐにやめてしまうことが多い。あるいは、ほかの店に移ることもあるだろう。それに若いということは、当然ながら、若い男からの誘惑をいかに上手に切り抜けるかという戦略的対応を迫られるが、それに失敗して、店から去っていくという結末を迎える事が数知れない。個人でやって来るお客は、自分が訪れるお店に若い女の子が居るかどうかで、その訪問の頻度も変化する。また会社ぐるみでの接待でも、若い女の子が少なくて、その価値も減少する。水商売では年増の女性は敬遠されがちである。その理由が仙吉には判然としない。何故なら仙吉は、若い女性よりもちょっとばかり年を食ったような、年寄りとまでは行かない女に心が傾斜しがちだからである。何はともあれ、若くて美人の女の子は、時間給の高いキャバクラや高級クラブで仕事を見つけたがる。しかしそれも20歳代の女性に限るだろう。30歳に足を踏み入れた途端、この仕事の将来性が短いことを意識すればするほど、水商売で働き続けることは不可能だと感じざるをえない様々の経験を嘗めさせられるのである。そんなとき、自分のお店を持ってみたいという欲が芽生えれば、それは水商売にかなり真剣に取り組んで来たことの証拠だろう。しかし開店するにはお金が必要だ。お金が三四百万あれば、リースであれレンタルであれ、新しいお店を開くことは簡単だが、加えて店を持続していくだけの自信がなければならぬ。中洲では人の命と同じように、死に絶えた店と開店する店が交互に新たな情景を形作っていく。古いままの昔の店の看板の装いを変えることなく、新たな開店の産声を聞くこともない、閉じてしまった店も少なからず存在する。開店後一年間続けば、その後三年は間違いなく大丈夫だという話がある。あるいは一年間は赤字覚悟で仕事をしなければ、その先の展望は開けないという話もある。ここにはもう一つ忘れてはいけない事実、パトロン存在の有りや無しがある。金銭的援助を頼ることの出来るパパの存在だ。どういう訳か、男は愛人ではなく、旦那でもなくパパという呼称が用いられる。

「新しいお店が開店するから一緒に行ってみない」と、純子ママは仙吉に誘いの言葉をかけた。仙吉はその日、飲み過ぎた酒の所為か奇妙にも気分がハイテンションになっていて、喜んでその申し出を受け入れた。新しいお店は「エース」という名前だったが、これはトランプのエースだろうと、仙吉は勝手に考えた。つまりナンバーワンということだろう。この業界でトップになるのだとは、店の看板だけでも大した心意気だと半ば呆れ、半ば賛嘆の念を禁じ得なかった。新しいママは韓国クラブに勤めていたとのことだった。純子ママは何故か、韓国クラブに対して嫌悪感があるようだった。しかし昵懇のお客の一人から、新しいママのことをよろしく指導して経営を手助けしてくれないかと依頼され、電話で相談を受けたりした時にも、事細かくいろんなことを助言した手前、開店にはどうしても顔を出さなければならなくなったのだと、言い訳がましいところも見せずに、純子ママは仙吉にこっそり耳打ちした。店が終わってから、由紀恵ちゃん、桂子、桜子、都合五人で威勢良く出かけたものの、開店にしてはお客の数も一人二人で、純

子ママの知り合いの、ある中小企業社長もそこそこに帰っていくと、ほかには客は誰もいなくなってしまった。エースのママは美人で、いかにも男好きのする容貌をたたえ、水も滴る女の雰囲気を感じながらも漂わせていた。ほかにママの姉と称する日本語に堪能な女性もいた。ママは日本語が流暢とまでは行かないが、意志の疎通に困ることはないようだった。韓国人特有のアクセントと抑揚の日本語は、仙吉が韓国人スナックですでに聞き馴染んだものだった。おそらくこの奇妙な日本語が、日本人のお客にとって、ママに対するたまらない魅力を倍加させる要素なのかもしれないと、仙吉は胸の内で考えた。

仙吉が韓国人スナックに初めて行ったのは、大学の同僚で韓国人教授に連れられ、学科の忘年会後の二次会の時だった。ほかの教員連中で中洲のスナックを馴染みにする者はなさそうで、誰もほかの店を知っている様子はなかった。七八人も一緒に入店すると、狭い店内は押しくらまんじゅうで、やっと座れる体たらくだったが、それがかえって親密さを増大させたのかもしれない。二次会の雰囲気がカラオケで更にいっそう盛り上がり、同僚内でのこの店の評判も上々だった。韓国人ママは実に気配りがうまく、教員という上等のお客の扱いにそれなりの手腕を発揮した。その証拠に、学科の飲み会の後は、必ずそこへ足を向けることが多くなった。仙吉もこの店には好印象を抱いたが、それはママの、奇妙かもしれないが、仕事に対する一途な接待責任を表に出す態度を、好感を持って眺めたからである。お客を満足させるために何をしなければならぬか、長い経験から培った仕事ぶりは、単に同国人教授との付き合いだけから派生するものではないように思われた。確かに教授は、何かにつけて同僚をこの店へ導き入れることを常に行っているようだった。それは後々分かったことだが、彼がほかの店へ行くことはなかった。仙吉はそのころ、フィリピンの若い女の子が多いパブや別の同僚に紹介してもらった「愛人」などに、仲間と出かけるのが普通だった。特別個人で馴染みの店も持たず、連れて行かれる店へ黙って付いていくだけだった。それは飲み代が高く付くという理由だけではなく、そんな遊びに興味がなかったからでもある。作家の石川淳と同じように、懐から財布入れをそっくり出して、「これで飲ませてくれ」なんぞと、格好いい台詞を吐けたらいいなどは、常日頃から仙吉も思っていたが、それを実行することはなかった。実際、石川淳は酒も強かったろうし、女子供なんぞにはまるで関心がなかったろう。だから飲むことだけが重要で、ほかの夾雑物に目が向くことはないのである。しかし仙吉の関心は、その女子供なのである。酒はそれに付随するもので、本来、一番知りたいことは、女子供がどのような感覚で今を生きているかなのである。本心からではないが、自分はどうして女に生まれなかったのだろうか、と、仙吉は時々冗談めかして話すことがある。男社会の権力を競い合う力勝負の場所は、仙吉の望む世界ではない。もちろん女の世界でも、妬み嫉みは日常茶飯事ではあるが、力と力がぶつかって血生臭い切った張ったが起る前に、つまり、勝負を問う前に決着が付くのが女性の世界である。従って知力の勝負、知的頭脳の対決と言っているかもしれない。表向きとは違う裏技の勝負となりがちだ。女は感情の動物だと、男はよくもの申す。だから感情を制御できない女は、男の奴隷に成り下がるのだと。男は女の感情に訴える甘い言葉を連発しながら、女を自分のコントロール下に置く。しかし知的な女は、男の甘い言葉から反対に非情なこの世の掟、つまりどちらが支配権を持つかの分岐点を見いだす。いかにも表面は男に従順さを繕いながら、その実、実際の支配権力は女が所持する。何故なら男は女なしには生きていけないが、女は男なしでも生きていくことは容易だからである。

仙吉が最初に一人で中洲のスナックを訪ねたのは、いつのことだったろうか。インターネットで中洲のスナック関係のホームページをあれこれ捜していると、偶然なのか、ママの生年月日が仙吉と一日違いというのが目にとまった。しかもママの写真もそれなりに仙吉お気に入りのいわゆる美形で、機会があれば是非行ってみたいものだと思っていた。そのチャンスはある時やって来た。いつもなら三人で中洲を訪問するのが常だったNが、病気で入院していることを聞いた仙吉とSは、Nを天神近くの病院に見舞った後、二人で中洲を訪ねることにした。しかしSはまるで中洲の店一軒さえも知らない。というより事細かな情報を貯えて、中洲についていっばしの通になる等という料簡がないから、一度訪ねた店が記憶に残ることはない。仙吉は仕方なく、前から気になっていたプチペルペという意味不明の店を捜すことに決めた。タクシーの運転手に住所とビルの名前だけを告げて、運良く案内してもらった。というのも、そのスナックのある中洲が近距離だったからだけでなく、意外とタクシーの運転手は、具体的なビルの名前を知らず、乗車拒否され、何台もやり過ごした後で、やっと運転手が了承したからである。Sは初めて訪れたこの店が気に入らないようだったが、仙吉はその日を境にして足繁く通うようになった。場所は中洲の中でもあまりパツとしない、小さな薄汚れた感じのするビルだったが、ママが小柄で話し上手だったことが、仙吉には気安く通えるような感じを与えた。仙吉は大柄な女が嫌いである。圧倒されるような切迫感と、繊細さとは反対の大胆極まりない早口の大声で語る大女には、いつも神経を切り刻まれるような恐怖感を覚えるのである。それに端的に言ってしまえば、自分より背丈の高い女には、性的魅力をどうしても感じる事が出来ない。プチペルペはその時、すでにビルの二階から四階へ移っていたし、店の名前も変わっていた。仙吉はすぐには、その辺の事情は何も分からなかった。後になって知ったところでは、賃貸ビルでは上階の方に行くほど家賃が安くなるということだった。経営上から考えれば、店の家賃を出来る限り節約することは、生き残りかけた商売上の、どうしても避けられぬ最低の戦略である。中洲には三千軒とも四千軒ともいわれる店が存在する。しかし果たして、その中のどれほどの店が健全な経営で利益を上げていることだろうか。そもそも健全な経営という言葉が成り立つ要素は、中洲のような繁華街にあるのだろうか。水商売とは、水が高きから低きへと流れるように、あぶく銭に等しいお金が、魚のようにあちこちを徘徊しながら泳ぎ回り、結局のところ落ち着くべきところへ流れ落ちるのではないだろうか。その行き着く先で、お賽銭箱からお金を集めるように集金するのは何者だろうか。一体誰が一番金儲けをしているのだろうか。すでに中洲通いが数年に及ぶ仙吉にも、お金の行き着く先が見えてこないのである。

スナック「プチペルペ」の由美子ママは福岡市内の私立女子高校を中退後、ずっと中洲で働き続けてきた。だから世間の常識から言えば、水商売ではそれなりのベテランということが出来よう。年齢はやっと30歳を過ぎたばかりだというのに、一人だけの男の子は小学4年生、バツイチで、かなり中州から離れた田舎のマンションで親子二人暮らしである。中洲でママと呼ばれるには、自分のお店を持たなくてはならない。そのためには、自分のお店を開店する為のお金と、お客を呼び寄せる集客力がなければならない。集客力とは、端的に言えばママのお客を引きつける個人的魅力である。仙吉はその個人的魅力に惹かれて、由美子ママのスナックを頻りに訪れるようになった。ホームページで見つけたママの写真とママの生年月日が、仙吉の気を惹いたとあって良いだろう。生年月日は僅かに一日違いだった。奇妙なことだが、現今のスナックには酒とカ

ラオケしかない。しかし単に、アルコールだけがお客の気晴らしと楽しみであるわけではない。またカラオケで歌うことで、その気晴らしが最高潮に達するわけでもない。飲むのが好きであれば、一人で飲めば十分だろうし、わざわざ若い女性を侍らせてお酒を飲むこともないだろう。その相手が若くて可愛い女性でなければならぬのは、何故だろう。酒は当然ながら、普通の場合、日常的に抑制している各人の性的リビドーを解放する。つまり男女間の性的関係に対するブレーキの弱体化が生じるのである。若さに対する、あるいは女性の性的魅力に対する憧れが、お酒によって異常な程度で高揚する。従ってアルコールの酩酊作用は積もり積もって、大袈裟に言えば、世界の裏面史的歴史階梯を垣間見させてくれることになる。男女間の自然な時間との戦いを、その場で目の前に彷彿として実現させるような歴史的パノラマである。端的に言うてしまおうとしよう。ママの性的魅力に惹かれる男どもは、可能ならば一夜の契りを求めながら、スナック通いに精を出す。しかしそれが成就されることは少ない。ここには奇妙な市場関係が存在することになる。取引が成り立つことはないのに、仮の売買を求める欲望の声は静かに底流として市場の何処かを流れ続ける。かくしてその取引が成り立った時、男女二人の間に、特別の感情の渦巻がその場を彩ることはあるのだろうか。カラオケは自己発現の欲求を満たす奇妙な仕掛けである。沈思黙考は、時間の過ごし方として、人が一番困難を感じる態度、様態だろう。声を出して歌を歌うことは、しかも現今どのスナックにもある性能の素晴らしいカラオケ装置から流れる流行歌、または巷に溢れる様々な歌を絶唱することによって、アルコールの酔いと絡まり、特別の歌空間を醸成する事になる。しかも回りには絶世とまでは行かずとも、それなりの若き美女たちが群れている。勘定がそこそこでとまらなくなるのは理の当然であろう。飲み代とカラオケの料金、また美女たちが飲むドリンク、アルコール類の代金は、目くら立てるほどの金額ではないにしても、安月給のサラリーマンにはかなりこたえる出費となるのも仕方のないことだろう。

仙吉は 2002 年 10 月 5 日の日付で、ある若き中国人女性にEメールの手紙の返事を書いた。彼女は日本の首都のT大学の修士課程に籍を置き、出来れば将来、研究者として学者の道を進む可能性を探っている途中だった。仙吉の長女が、ある偶然から中国蘇州市にある職業大学で、日本語会話の先生として赴任したときの同僚である。二人は年齢も近く、長女は彼女と大の仲良しとして過ごしたが、勉学意欲に燃える彼女は日本の長崎の大学に留学し、更に日本語その他の勉強に磨きをかけたいため、修士課程に進学していた。

「研究者とは一体どんな人でしょうか」というお尋ねの題目に対して、私なりの考えを書いてみることにしましょう。本当の正真正銘の研究者になるには、いったい何を研究したいのかがその前提条件になるでしょう。この前提条件がなければ、ただの大学教員になって、専ら学生の教育に力を尽くすしか道はないように思われます。大学も研究所もピンからキリまであるのですから、大学教員にしろ研究所の研究員にしろ、その質的な段階という様々に差別化された状況がすぐに想像できます。ですから研究者の前には形容詞が附されねばならないでしょう。一流の、二流の三流の、以下順番が下がるに従って無数の段階的研究者を考えることができます。

私は東京オリンピックの年に、当時世間では駅弁大学といわれる地方のY大学に入学しました。駅弁はご存じですか?鉄道駅のプラットホームで、後ろ首から両肩を通るひもに吊した大きな木箱に何十個もの弁当を納め、「弁当、弁当」と声を張り上げながら、一個数百円する弁当が売られていました。当時の値段はもっと安い値段だったかもしれ

ません。駅弁大学という呼び方と、駅で売られる弁当から、どうしてこのような特殊な関係が抽出されたかについては、戦後の日本の大学制度上の問題があります。アメリカの占領軍政策からでしょうか、軍国主義に突き進んだ日本の第二次大戦の反省に立ち、アメリカのシステムを踏襲した新制大学が各都道府県に新設されました。各県に一つ、必ず国立大学が存在することになりました。もちろん戦前から存在する東大、京大などの旧帝国大学はそのまま残りました。そして今でも日本の国内では、旧帝大という言葉は、変わることなくその価値を保っています。駅弁大学といわれる大学はそれら旧帝大に比べれば、何ランクも下であることを示す一種の侮蔑語です。大学は私が進学した当時、国立一期校と二期校のランク付けがありました。一期校のトップに君臨していたのが旧帝大です。受験生は国立大学を二回受験できるシステムで、一期校の名門大学に合格できなかった者たちが、それでも安い授業料の国立大学を目指して、落ちぶれた気持ちを抱きながら経済的な理由から二期校を受験しました。これについては、私のホームページの娘に宛てたメールの中に書いていますから、詳しくは述べません。

妻の美穂さんも同じようにホームページに書いていますが、Y大学はそれでも勉強するには非常にいい環境でした。当時はJRではなく国鉄の山陽本線から三十分ほど離れたY町は、「西の京都」と呼ばれるほど静かなたたずまいで、田舎者には実に暮らしやすい落ち着いた雰囲気の中で、大学の先生も東大や京都大学など、それこそ一流の旧帝大を出た穏やかな学者である人が多かったように思われます。当時「倫理学」を教えていたT先生が、一期校に落ちて元気なく二期校のY大学に入学した新入生に、励ましの元気づける巧みな言い回しで、勉学にとっては一期校も二期校もなく、本人の学問に対する意欲と姿勢がすべてなのだと言ったのが、講義の最初に話してくれたのです。これは故郷の親元を離れ、大学で初めて勉学を始める学生にとって、大きな激励になり勇気を与えてくれるものでした。

何故こんな話をするのかというと、そのときの落魄者の気持ちを、新たなプラスの方向に転回させてくれた倫理学のT教授に感謝したいからです。多分あの言葉がなければ、私が大学院に進学して大学の教員を目指すことはなかったでしょう。私は甘い考えで「数学者」になりたい、出来るなら一流とまでは行かずとも3流ぐらいの数学者になって、俗世間と関係ない生活をしたいと夢想して文理学部の理学科に入学しました。一年後の専攻学科決定では、数学科へ進学するつもりで実際その道に進みました。しかしその険しい路はすぐに挫折に終わりました。専門課程の数学の勉強は、一瞬の停滞も許されず必死になって勉強しないと理解できなくなるのです。高校までの「算数」とはまるで違う世界に足を踏み入れ、しかもそのとき、親からの仕送りも限られていて経済的な余裕がなく、アルバイトに精を出さざるをえず、数学科での勉学に息詰まり袋小路に落ち込みました。

さてさてそのとき、私は大学で初めて習い始めたドイツ語と相性がよいと勝手に独断で思いこみ、じゃあいっそのこと文理科に転学科してドイツ語の勉強に切り替えてみるかと決断しました。そのため大学は卒業まで5年間かかりましたが、自分の将来の生きていく上での支柱になる学問の対象を見つけることができたのです。とはいえ、ドイツ文学は奥が深く、ドイツ語という語学の勉強だけでも容易ではありませんでした。しかし卒業後は当然のごとく、大学院への進学を目指して、どこの大学でも良いから合格するまで受験するんだという気になっていました。その気持ちはかなり強いものでした。そのころは運良く修士課程の二年間を終了すれば、何とか大学に職を得ることが可能だったのです。しかし女性にとっては、そのころもやはり、大学の教員としてのポストを得ること

は容易ではありませんでした。

大学の教員になった私は、特別何かを研究するでもなくただ漠然と過ごしてきました。従ってまともな論文を書くこともありませんし、学会で発表することもありません。しかしあえて述べるとすれば、「考える」ことだけは続けています。その間いろんな書物や小説は読みましたし、他人の論文も読みましたが、横着を承知で言えば、これは素晴らしいと思えるものに出会うことがあまりありませんでした。かくして私は無駄な時間を過ごすばかりで、何ら成果を上げることの出来ない無能者として、「研究者」と称することは出来ません。しかし私は他の人とは違うことを考えているんだと、思いこんでいるのです。それについて述べるのは別の機会に譲りますが、研究者でないものがいわゆる他の研究者について判断することは当然ながらできません。

そこでちょっと視点を変えて、別の角度から話を続けましょう。私が大学院に入学した1969（昭和44）年は、いわゆる大学紛争に揺れる時期で、事実私が進学した大学も半年間ほど封鎖された状態で、大学構内にはいることすらままならず、況や講義を受けることなど不可能でした。ではどうしていたのか？いきなり入り口で頭をがっつんと棍棒で殴られたようでした。何一つ導きの星もなければ、何かの態度を迫られることもなく、ただただ無駄な時間を過ごしたただけでした。幸いなことに、私は大学院の奨学金を受けることができたのと、自宅通学だった関係上、お金に困ることはなくなりました。K大の大学院に通っていると言うだけで、家庭教師としてかなりいいお金を稼ぐことができました。ただこのときのK大学での様々の経験は、将来の人間や社会に対する考えに決定的な意味を持つことになりました。

大学の教授連中の優柔不断さや、政治的態度決定を迫られた時の曖昧さ、その他数えあげればキリがありませんが、極端な例を挙げれば、学生の完全な味方として自己変革を実践したある有名な教授から、学生との交渉に疲労困憊して自殺した哲学科の教授に到るまで、まさしく社会の縮図そのままに、人間のあらゆる弱い面を観察することが出来ました。私たちの独文科の主任教授、Fプロフェッサーは、東京の目黒に自宅を持つ、日本国内でも有名な内外に知れ渡った先生でした。日本相撲協会の横綱審議委員会の委員長を務めたり、様々な随筆を巧みに書きこなし、森鷗外と漱石に関する書物で讀賣文学賞を受賞し、数多くの本を出版している先生でした。九州では天皇とまで言われるほどの多くの弟子たちを人脈として抱え、多方面にわたって八面六臂の活躍をする著名な教授でしたが、大学紛争のさなかには、東京にとどまり福岡に来ることはほとんどなかったと言っていいでしょう。大学は占拠され、K大の図書館の本もずいぶんと破壊されたと聞いていますが、その後どうなったのか詳しい情報を特に知りたいとも思いませんでした。

結局何を言いたいのかというと、「研究者」も制度や仕組みが確かなものとして存在する場所でしか生活できないのは間違いありません。しかも研究者も日常の普通の生活を送る人間なのですから、制度の中で自分の研究者としてのポストを手に入れるため、かなり不自然な態度決定を迫られることが時々生じることがあります。つまり組織の中の主任教授に対する反抗、抵抗、対立といったことを貫くことは、同時にその制度の中では生きていけないことを意味します。主任教授に対する不従順は、その制度の中で生きていくためには決して許されぬ態度であるでしょう。

しかしまた見方を変えてみれば、制度とはいえ、様々な可能性、別の制度も存在するので、自分が所属する現在のものがすべてであるわけでもないのです。このように、物事は柔軟に考えれば自ずと道は開けてくるでしょう。別に一流の研究者として生

きていけなくても、二流であれ三流であれ、研究者として本人がその自覚で進めば、それは間違いなく研究者にほかなりません。私たちはいつも自分の身近なものに近視眼的に規制されがちですが、他の可能性をちょっとだけでも考えることで、様々なほかの道を発見できるのです。この僅かな視点の変換は、新しい局面を眺める際に、常に重要な態度決定の要素として浮上することは間違いありません。

あらゆることは、自分が自分の生活を成り立たせるために、自分に対してどんな風に考えるかにかかっています。他人の考えは単なる参考になるだけです。各人がそれぞれの生活歴を背負って生きているのですから、研究者であれ、普通のサラリーマンであれ、その基本的要素は変わり様もない厳正な事実として存在し続けます。金持ちの子弟が大して勉強せずとも運良く研究者になったとしても、それは他人の生活であり生き方にすぎません。貧乏人の子供が刻苦勉励の後、偉大な学者になったとしても、その当人の問題です。しかし一番肝心要のことは、自分の現実ちゃんと向き合い、その中で自分の可能性の中から、自分がベストだと思うことに挑戦すること、それ以外に自己にとって素晴らしいことがあるとは思えません。人は美しい夢を見ることは好みますが、苛酷な現実を凝視することを避けがちです。

さてこれが一般論として「研究者」という言葉からでてくる現実はどうであるか？この問題はまた別の機会に譲ることにします。日本の社会では「建て前と本音」という、世の中に流通する言葉があります。おそらく「研究者」と言われる人々も、その二枚の舌を上手に使いながら生活しているのです。この二重構造を理解しないと日本の社会で生きていくことは時に非常な重荷になるでしょう。女性問題やセクハラの問題に関しても、表と裏の世界が時には巧妙に使い分けられます。しかし日本社会を理解することと、それに同化することはまた別問題ですから、あまりこのような脇道に関わり合う必要はないのかもしれない。私は抽象的な概念語を操る言葉の羅列は好みません。いつも具体的な現実の出来事から出発することを原則にしています。そこからなら、様々の未だ見えなかった新たな現実が見えるかもしれないからです。以上、とりあえず今日はここまでにしておきます。

純子ママと由紀恵ちゃんの軋轢がいつ始まったのかは、はっきりしない。「私、3月一杯でこのお店を辞めることになりました。だけど、ママに内緒にしておいてと口止めされているので、誰にも言わないでくださいね」と、由紀恵ちゃんからこっそり耳打ちされた時、仙吉はやはり来るべきものが来たんだと、悲しい複雑な気持ちに捉えられた。それ以前から何度となく、お客に対する接待を巡る考え方の違いから、二人の間に対立関係が芽生えているのは、仙吉にも薄々わかっていた。その晩、別の店でアフターの逢引きを約束して、由紀恵ちゃんから詳しく事情を聞いたが、いったん振れた紐を元に戻すのは不可能だということが、その場の話から想像できた。(つづく)